

◎2020年5月

◎第1940回 定期公演 Cプログラム

オーケストラには都市の歴史が詰まっている。ウォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～1791）の《交響曲第31番》はパリのオーケストラ、コンセール・スピリチュエルのために書かれ、ジョージ・ガーシュウィン（1898～1937）の《ピアノ協奏曲へ調》はニューヨーク交響楽団、フランシス・プーランク（1899～1963）の《グロリア》はボストン交響楽団のために書かれた。いずれも依頼者の期待を背負った渾身（こんしん）の一作だ。

■モーツァルト

■交響曲 第31番 ニ長調 K. 297「パリ」（約20分）

1725年に創設されたコンセール・スピリチュエルは、定期的に行われるいわゆる公開演奏会の初期モデルとなった。フランスとイタリアの作曲家に偏ったプログラムが大きく変わるのは、1777年に、ジョゼフ・ルグロがこのオーケストラの支配人となってからだ。オペラ座の歌手でもあったルグロは1774年に、グルックのフランス語版《オルフェウス》でオルフェウス役を歌い、グルック歌手として名を馳（は）せた。

このルグロから「大交響曲」の依頼を受けたモーツァルトには、あるいはオペラ作曲家としての成功も念頭にあったかもしれない。1777年10月末から、母親とともにマンハイムに滞在して最先端のオーケストラに刺激を得たモーツァルトは、1778年3月23日、パリに到着する。当時クラリネットを常備しているのは、マンハイムの宮廷オーケストラと、パリのオペラ座、そしてコンセール・スピリチュエルくらいだった。結果として《交響曲第31番》は、モーツァルトの交響曲で初めてクラリネットを採用した標準2管編成となった。初演前に体調を崩した母親は、7月3日に息を引き取る。父親に母の容態よりも初演について詳しく報告するモーツァルトの手紙からは、母子がこの交響曲の成功をいかに強く願っていたかが伝わってくる。

第1楽章（アレグロ・アッサイ、4/4拍子）でニ長調の主和音を全楽器で強奏する堂々とした始まりは、パリの聴衆の趣味を意識したものである。第2楽章（アンダンテ、6/8拍子）は初演でルグロの気に召さず、曲の長さや転調などを簡略化した別稿（3/4拍子）が

存在する。クラリネット、トランペット、ティンパニは休止し、バロック風の落ち着いた曲調に転調の美しさが映える。第3楽章（アレグロ、2/2拍子）ではお決まりの強奏による開始の前にヴァイオリンだけの弱音の序奏が8小節ついており、モーツァルトも聴衆の反応を楽しんだ。

作曲年代：1778年5月末頃～6月12日以前

初演：1778年6月18日、パリ、コンセール・スピリチュエル

（安川智子）